

令和6年度(2024年度)厚生労働省事業
公認心理師実習演習担当教員及び
実習指導者養成講習会

ハンドブック

ー 担当教員と指導者がともに
養成を進めていくためのヒント ー

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター



公認心理師
実習演習担当教員及び
実習指導者養成講習会

目次

ハンドブックについて	1
01 講習会について	4
講習会の目的	4
講習会のコンセプト	5
科目の考え方	6
02 講習科目のポイント	10
03 講習会設計・運営に関わるQ&A	26
企画・設計について	26
運営について	28
講習内容について	30
その他	31
04 受講者の声	32
05 事例：受講者のその後	34
A施設	34
B大学	36

ハンドブックについて

公認心理師の実習演習に携わる教員や現場の指導者を養成するための講習会が令和5年度（2023年度）から始まりました。調査事業をふまえてカリキュラム案・シラバス案を作成、初めての講習会を実施し、その結果をもとに工夫や改善をして2回目となる令和6年度（2024年度）の講習会を実施する、という3年間にわたる取り組みは、公認心理師の様々な職能団体、学会、5分野の実務者が連携し、実現したことになります。

立場や分野や所属団体が異なり、しかしながら、各現場で実際に実習・演習に携わっている公認心理師30名以上で協議を重ね、知恵を絞り、より良い公認心理師の養成と業界の発展につながるよう一致団結して大きな事業を行ったという経験は、私たちに多くの学びと気づきをもたらしてくれました。

そして、2,000名以上の受講者の先生方が寄せてくださったアンケート結果も、今後の後進の育成や講習会の在り方を考える上での大きな財産となっています。

そこで、私たちがこの3年間の取り組みを経て気づいたこと、工夫したこと、大事にしたことなどを整理し、今後の指導者養成や講習会運営に役立てていただければと思います、このハンドブックを作成しました。養成にかかわる多くの方々のヒントになれば嬉しいです。

2025年3月

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター病院
臨床心理部 臨床心理室長 今村扶美

このハンドブックは…

- ✓ 講習会を実施する方が企画運営の参考にしたり、講習会を受講する方がより効果的な学習を進めるための一助とするなど、公認心理師の養成に関わる様々な立場の方にご活用いただけます。

本資料での用語について

- ◆ 実習演習担当教員は「教員」、実習指導者は「指導者」と表記しています。
- ◆ 両者をまとめて表現する際は「指導する者」としています。



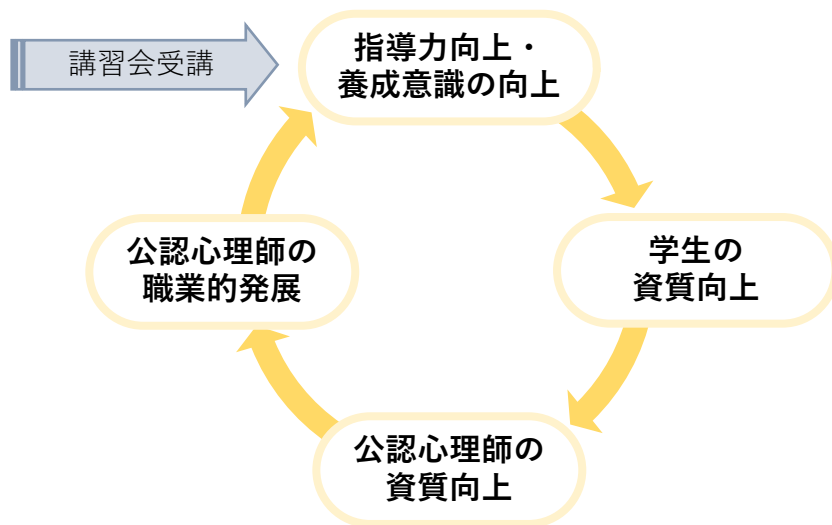
01 講習会について

講習会の目的

- 本講習会は、主に公認心理師として5年程度の業務経験・指導経験を有する方を対象に、公認心理師を志す学生の適切な養成に向け、主に以下の3つを達成することを目的としています。

- ✓ 学生指導の重要性や指導者としての役割の共通認識をはかる
- ✓ 到達目標を共有し、学生指導の指導水準を担保する
- ✓ 養成・育成に対する意識醸成と実習演習の裾野の拡大

- さらに、本講習会を通して、公認心理師を養成するための指導力が向上・均一化し、学生及び公認心理師の資質が向上することで、ひいては、公認心理師の職業的発展や公認心理師全体のプレゼンス向上につなげることを目指しています。



講習会のコンセプト

- 令和5・6年度の講習会設計にあたっては、令和4年度の講習会カリキュラムの検討時より大事にしてきた以下の点について重視しました。

教員・指導者による意見交換の促進

- ✓ 学生の送り出し側・受け入れ側の互いの認識や課題感を共有することを重視
- ✓ 意見交換を通じ、指導の方向性・目標をすり合わせることで、学生の質の均一化を目指す

所属・立場を超えた連帯と合意形成

- ✓ 公認心理師業界全体として、養成の促進やプレゼンス向上を目指す
- ✓ 職能団体や5分野等の立場・枠を超えた多様な関係者による連帯を促進

自身の内省を指導の充実につなげる

- ✓ 公認心理師としての在り方を振り返り、指導へと活かす
- ✓ 講習会を受講者自身の振り返りの場として活用する

知識の習得＜アイデアの獲得

- ✓ 各施設・教育現場の実情に合わせて工夫し、指導の実践に応用していくことを重視する

01 講習会について

科目の考え方

- 指導する者に求められる資質を念頭に、本講習会のカリキュラムは5つの分類に整理され、組み立てられています。

分類	学習内容の要点
基本理念・基本姿勢	✓ 指導する者としての基本的な考え方と必要な知識 ✓ 養成や現場実務の実態 ✓ 実習演習を通じた学生の到達目標
企画・管理	✓ 安全な実習演習の環境を構築するための体制整備・運用方法 ✓ 効果的な実習・演習プログラムの企画・設計の要点
運営	✓ 実習・演習を実際に運営する際の要点
指導技法	✓ 学生のやり取りにおける効果的なコミュニケーション方法 ✓ 学生の学習を促進するための指導技法
総括	✓ 講習内容の振り返り ✓ 公認心理師の養成における課題や展望に関する意見交換

- 科目同士の相互関係を理解し、関係する科目において教授する内容を連動・区別するなど、受講生にとって体系的な学びとなるような工夫も必要です。
- 12科目のうち、教員と指導者が連携して行う心理実習・心理実践実習を中心とした6科目は、両者が合同で受講する形式としました。

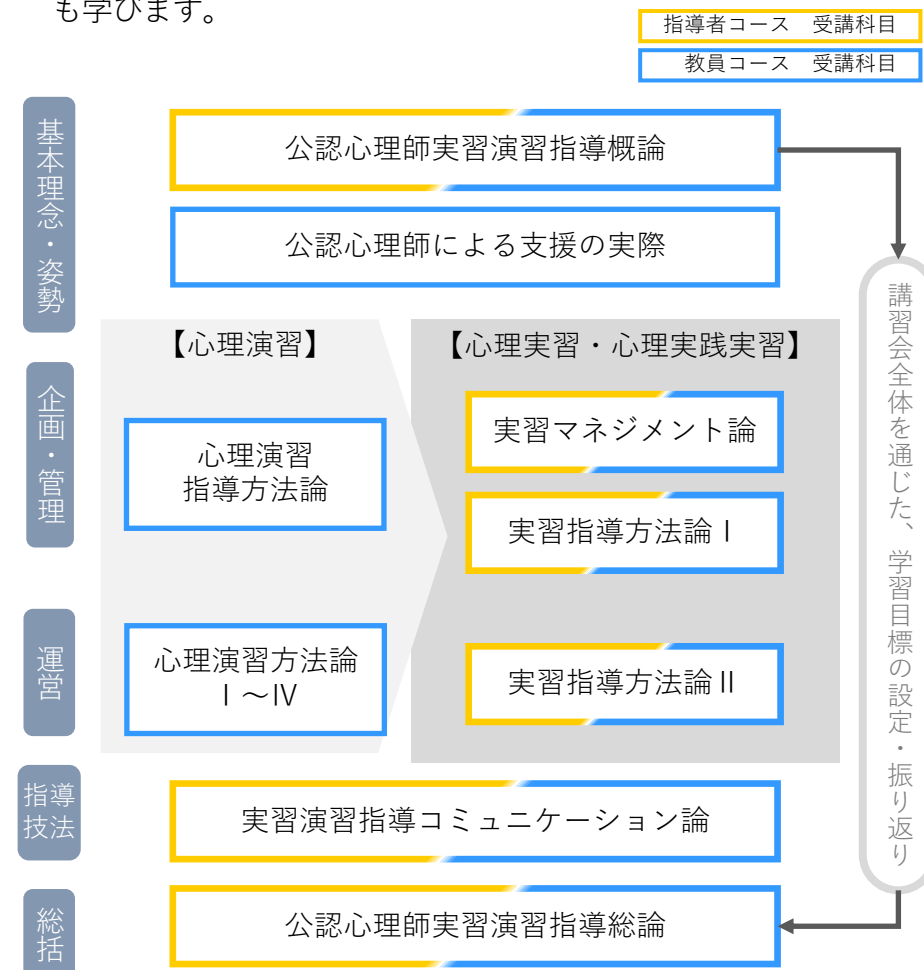
【12科目のシラバスについては下記報告書のp.78～p.101を参照】

令和4年度障害者総合福祉推進事業「公認心理師の多様な活躍につながる人材育成の在り方に資する調査」報告書

<https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/001113619.pdf>

1 2 科目の位置づけ・コース別の受講科目

- 教員コースは、指導者コースの科目と同一の科目に加え、5分野の現場実態を知る「公認心理師の支援の実際」、学部生の心理演習を知る「心理演習指導方法論」「心理演習方法論Ⅰ～Ⅳ」も学びます。



※12科目の詳細は次ページ以降の「令和5・6年度における講習内容のポイント」を参照

- ✓ 02章では、講習会の講師がシラバスから講習内容を組み立てるにあたり、工夫した点や苦労した点等をふまえ、ポイントやアイデアをまとめました。



02 講習科目のポイント

12科目の講師陣でのワーキング開催

- 本講習会では、各団体や分野を超えて講師が集まり、認識共有や内容調整を行うワーキンググループを開催しました。令和5・6年度の講師による取り組みや、大事にしたいと考えたアイデア・ポイント等について紹介します。

本セッションの見方

※受講するコース

科目名

指導者

教員

本科目を通じて受講者に伝えたかったこと、現場に持ち帰って活用してほしいこと等の要点・講師陣からのメッセージ

- シラバスに記載されている科目概要の抜粋

Point 1

桃色：各科目で押さえないポイント

idea

- ✓ ～令和5・6年度の実施をふまえたアイデア・ポイント～

Point 2

茶色：科目間・講師間の方との連携やすみ分け、全体の統一感をはかるポイント

idea

- ✓ ～令和5・6年度の実施をふまえたアイデア・ポイント～

Point 3

藤色：ワークを通じた意見交換を促進する際のポイント

idea

- ✓ ～令和5・6年度の実施をふまえたアイデア・ポイント～

公認心理師実習演習指導概論

指導者

教員

公認心理師の養成の意義について考え、個人のキャリア・成長にも、業界全体の成熟にもつながる課題であることを認識する

- 公認心理師養成に関する基本的な考え方や知識を学ぶ。
- 講義では、養成課程の概要、実習演習の位置づけや学部・大学院別にみた学生の到達目標について理解する。
- 演習では、受講者同士の意見交換を通じて、養成実践上の課題の共有や、指導者講習会における自らの学習目標を設定する。

Point 1

idea

<科目のポイント>

養成に関する課題や、各立場・持ち場での工夫・試行錯誤について意見交換しながら、養成の在り方について考える

- ✓ 最初の科目として、養成講習会の目的や養成の意義、養成プロセスの全体像、公認心理師に関する障害者総合福祉推進事業のデータなども資料提示する。
- ✓ ワークでは、グループ内で互いの現状や課題意識を共有し、養成・育成がなぜ大事なのか、今後はどうつながるかをテーマに話し合いを行う。それらをふまえて、本講習会における、自分自身にとっての受講目標を設定する。

Point 2

idea

<科目・講師間での連携・調整>

全科目の担当者に対し、概論のスライドを基に事前に作成方針を共有

- ✓ 特に概論・総論はセットで考え、スライド構成や内容等につながりを持たせて、概論で触れたことを総論でまとめる構成とする。
- ✓ 養成における実習・演習の位置づけ(制度・カリキュラム)は資料提示のみとし、「実習指導方法論」にて具体的に講義する。

Point 3

idea

<ワーク・意見交換のポイント>

受講者が自身で考え、刺激しあい、気づきが得られるワーク設定

- ✓ ワーク例：「実習演習でどんなことに困っている/工夫をしているか?」「公認心理師を養成する意義や目的は何か?」「自分の課題は何か?」「講習会を通して学びたいことは何か?」
- ✓ 進行役や書記役の設定(例：「名前のあいうえお順で」と指示)や役割の交代について明示する。

02 講習科目のポイント

公認心理師による支援の実際

教員

5分野の業務や近年の動向、課題等の実態を知り、実習・演習で学ぶべき現場での実際的な支援内容をイメージする

- 5分野の業務や実習演習に関わる特徴を学ぶ。
- 講義では、実習演習担当教員が実習施設と連携し、充実した実習環境・内容を提供できるよう把握しておくべき情報を整理する。
- 演習では、実習演習担当教員が留意すべき事項や学生への指導内容を中心に議論し、実習施設との調整や連携等の実務に活かす。

Point
1

idea

<科目のポイント>

5分野それぞれの業務の特徴を伝えるとともに、各分野における実習の実態をイメージできるように説明する

- ✓ 各分野における実際の業務内容や支援場面、多職種との連携の実際等、（教科書ではわからない）現場の声を具体的に伝えることを重視する。そのため、現場での実践に精通した講師が講義を担当するのが望ましい。
- ✓ 各分野に関わる近年の動向（法律・制度、課題など）をトピックとして追加し、現場での支援とのつながりについて具体的に説明する。なお同分野内でも全てを網羅することはできないため、講師が経験のある領域を中心に上げると良い。
- ✓ 教員によって各分野の現場経験が異なるため、特定の分野の現場経験が少ない教員でも、実習の実態をイメージできるように実習プログラムや学生に学んでほしいポイント、教員に知っていてほしいことを具体的に伝える。

Point
2

idea

<科目・講師間での連携・調整>

5分野における業務の共通性と独自性を整理できるように講義を設計する

- ✓ 分野の独自性に加え、共通点にも触れる。本科目の最初に、各分野に共通する臨床業務の理念や公認心理師の役割等について短時間で講義を行い、その後、各分野の特徴や相違点が理解できる内容の講義に進む。
- ✓ 各分野の講義時間は、現在の公認心理師実習の状況や受け入れ施設数の割合等を考慮して設定する。医療機関は実習先として必須とされているため、十分な講義時間を確保する。

Point
3

idea

<ワーク・意見交換のポイント>

講義は分野に特化した内容、演習は複数分野で共通したテーマで実施する

- ✓ 意見交換の時間を十分に確保するため、いくつかの分野の講義後にワークを設定する（例：福祉と教育、司法・犯罪と産業・労働など、2つの分野をまとめてひとつのワークを行う）。
- ✓ ワークの一つ目は、受講者の5分野に関する実務経験を共有する時間をとれると良い。
- ✓ ワークは講義の内容を踏まえた上で、実習に学生を送り出す際の事前準備や留意事項、実習施設側との調整や連携、現状の課題等について話し合う（例：「教員と実習機関とが協働してできると良いこと」「教員が行うべき事前指導と実習中・実習後の対応」「実習先探しで苦労していること、その他困っていること」）。

02 講習科目のポイント

実習指導マネジメント論

指導者

教員

安全・安心な実習環境を作り、実習目的を効率的・効果的に達成するのに不可欠なマネジメントを知る

- 実習施設における実習プログラムを適切に管理するためのマネジメントの方法について学ぶ。
- 講義では、実習前準備や枠組みの構築、適切な情報管理、具体的な手続き等について取り扱う。また、実習施設と養成機関が連携する管理体制の構築や、実習時のトラブル対応について理解を深める。
- 演習では、他施設での好事例を受講者自身の所属組織での取り組みに応用する。

Point 1
idea <科目のポイント>
効果的な実習を行うためには、指導内容や技法だけでなく、それを下支える枠組みの明確化が必要であることを伝える

- ✓ 学生の派遣・受入は組織間で行うものであり、組織全体でのルール・体制整備が不可欠であることの共通理解を図る。
- ✓ 講義では、契約・事務的手続き、情報セキュリティ・安全管理（危機管理体制、感染症予防、ハラスメント防止等）、トラブル対応と連携の在り方など、実習における具体的なマネジメント方法を実習前・中・後の各段階ごとに学べるように構成する。

Point 2
idea <科目・講師間での連携・調整>
実習環境や体制構築を主軸とし、実習内容・技法は他科目で対応する

具体的な実習内容や指導技法は他科目で対応し、環境・体制整備やリスク管理等のマネジメントに特化した内容に焦点化する。

- ✓ 特に、近接科目である「実習指導方法論Ⅰ」「実習指導方法論Ⅱ」との講義内容の役割分担については、担当者間で十分に話し合いながら決定する。

Point 3
idea <ワーク・意見交換のポイント>
実習受け入れ・送り出しに対して、前向きな意識が持てるようなテーマ設定をする

- ✓ 教員と指導者が各現場でのマネジメントの実際について意見交換する。その際、工夫点や苦勞が報われたと感じる出来事も話し合ってもらうことでマネジメントに対する前向きな意欲を引き出す（例：事前準備の工夫、うまくいった対応などを話し合う）。
- ✓ トラブル対応は事後対応のみならず早期発見・介入の工夫、トラブル経験後の成長などについて議論することで前向きな着想が得られるよう配慮（例：実習期間中に個別対応が必要となった学生の事例を用い、事前予防と事後対応、実習施設と養成機関との連携の在り方について話し合う）。

実習指導方法論Ⅰ

指導者

教員

養成課程の学生が学ぶカリキュラムや演習・実習の位置づけ等の心理実習・心理実践実習の全体像・枠組を知る

- 心理実習及び心理実践実習におけるプログラムの企画・設計方法について学ぶ。
- 講義では、実習プロセスの全体像を把握し、各段階（事前実習・実習中・事後実習）に必要なポイントや工夫を習得する。
- 演習では、日々の実践を振り返り、それぞれの立場で意見交換しながら、所属組織におけるプログラムのアップデートに活かす。

Point 1
idea <科目のポイント>
事前実習・実習中・事後実習の各段階で重要なポイントや工夫が明確になるよう講義内容を設計する

- ✓ 学部～大学院のカリキュラムの全体構造と各段階での到達目標について整理し、全体の構造をつかみやすくするよう工夫する。
- ✓ 「担当ケース」については、厚生労働省の公的見解と現場での考え方を伝える。その際に、各現場の現時点での実践実習内容を否定せず、「より良いものにする工夫」「目指していくべき方向性」という形で具体例や工夫例を解説する。

Point 2
idea <科目・講師間での連携・調整>
他科目との重複が多い科目であり、用語の統一を意識して調整する

近接科目である「実習指導マネジメント論」「実習指導方法論Ⅱ」との講義内容の役割分担については、担当者間で十分に話し合いながら決定する。

- ✓ 「正統的周辺参加」というキー概念については「実習指導方法論Ⅰ・Ⅱ」とで共通させることを意識。その他の言葉遣いも確認し、齟齬がないよう統一する。

Point 3
idea <ワーク・意見交換のポイント>
受講者同士が苦勞を分かち合い、ともに学生を育てる気持ちが高まるよう「工夫」について議論を促す

- ✓ 今すでに学生を受け入れ実施している実習内容の不備・不足を指摘する形にならないよう配慮。また学生の不十分な点の改善だけでなく、学生の伸びしろに目を向けた意見交換になるよう、「工夫」について考える形でのテーマ設定や声掛けを実施（例：心理実践実習「担当ケース」の主体的関わりを高める工夫、レディネスが多様な実習生への指導上の工夫について話し合う）。

02 講習科目のポイント

実習指導方法論 II

指導者

教員

心理実習および心理実践実習の効果的な運用に必要な教員-指導者間連携の在り方を重視する

- 主に実習施設における心理実習及び心理実践実習プログラムの運営方法について学ぶ。
- 講義では、実習指導の場面を想定し、学生への態度や指導方法を具体的なプロセスで学ぶ。また、今後の巡回指導においても継続的に連携を深めることができるよう教員と指導者がチームとして指導にあたる意識を育む。
- 演習では、受講者自身の経験を振り返るとともに、学んだ講習内容を所属組織での取り組みに応用できるようにする。

Point 1 <科目のポイント> idea 心理学理論モデルを指導に活用することで、指導スキルを高い水準で安定させる

- ✓ 学生の主体的な学びを支援するための心理学理論（マズローの欲求5段階説、ARCS動機づけモデル、認知的徒弟制のステップ等）に基づいた指導法を紹介する。受講者が理解しやすいように、まずは馴染みのある理論モデルから説明を始め、段階を踏んで新しい理論モデルへと移行していく。また、理論に偏りすぎないように指導の場面で実際に使える具体的な言葉かけも併せて提示する。
- ✓ 新しい理論モデルを教員と指導者が共に学び、共通認識を持つことで、講習会終了後も実習プログラムの設計や学生指導に関する対話を続けていくための意識を育む。

Point 2 <科目・講師間での連携・調整> idea 実習指導方法論 I・II のつながりを考慮した上で講義内容を検討する

「実習指導方法論 I」は「II」の前段階と位置づけ、講義内容を構成する。まず、「I」では到達目標や枠組みを説明し、その基礎の上に「II」でより実践的な内容や具体的な方法を取り上げる。また、講義資料の作成段階、講義の実施中・実施後において、担当者間で密接に意見交換を行い、齟齬がでないようにする。

Point 3 <ワーク・意見交換のポイント> idea 講義と演習とを交互に繰り返し、学びを実践イメージへと結びつける

講義を情報のインプット、演習をアウトプットとして捉え、講義と演習を交互に行うことで学んだ情報を効果的に定着させるとともに実践をイメージできるように工夫する。受講者の理解度や疲労感を考慮してひとつひとつのワークは無理のない時間配分を設定すると共に、講義の冒頭でその進め方についてあらかじめ受講者に告知しておく（例：紹介した理論モデルについての意見交換を行う。「ここまでの講義の感想・疑問・今後の課題について意見交換をしてください」）

心理演習指導方法論

教員

心理演習方法論 I～IVに進むための基礎として、公認心理師の養成における心理演習の位置づけ・全体像を理解する

- 学部生の心理演習を中心に、プログラムの企画・設計方法や安全・適切な管理・運用方法について学ぶ。
- 講義を基本とし、心理演習の前後で学生に指導すべき内容や準備すべき事項を整理し、その必要性を理解する。
- 各養成機関内や実習演習担当教員間で共有すべき事項を学び、心理演習の環境整備に必要な体制構築の留意点を習得する。

Point 1 <科目のポイント> idea 充実した心理演習を運用するための企画・設計方法や安全性を確保するための体制構築について、具体的なイメージを持てるように伝える

- ✓ 事前学習・演習・事後学習の進め方、体験学習を促すための基本的役割、教材と評価方法、リスク管理・安全管理などについての理解を深められるように、各大学や講師の具体的な実践事例を紹介する。
- ✓ 情報が偏らないように複数の養成機関のシラバスを基に作成した一般的なモデルを例示した。

Point 2 <科目・講師間での連携・調整> idea 心理演習方法論 I～IVに進むための基礎的な科目として、I～IVの担当者と協議し、講義内容を構成する

- ✓ 「心理演習方法論 I～IV」がまとまりのある学習になるよう基礎的知識を整理する。
- ✓ 「心理演習方法論 I～IV」と内容の重複が生じないよう各科目の担当者と十分に話し合う。

Point 3 <ワーク・意見交換のポイント> idea 講義中心の科目の中にも、ミニワークを設定

本科目は講義のみの設定ではあるものの、リスクマネジメントについて考えるミニワークを設定し、「学生への対応」や「今後の予防策」について受講者が具体的に考える時間を設定した。

02 講習科目のポイント

心理演習方法論Ⅰ～Ⅳ

教員

心理実習や心理実践実習とのつながりを念頭におき、
心理演習で学生に身につけてほしいことを考え、プログラム内容に
応用できるようになる

- 学部生の心理演習における指導方法を【コミュニケーション】【検査・アセスメント】【心理面接】【地域支援】の4つの点を切り口に学ぶ。
- 学生が【コミュニケーション】【検査・アセスメント】【心理面接】【地域支援】を主体的にかつ安全に学べる演習プログラムの企画・設計と実施のあり方を体験的に学ぶ。
- 想定される学生指導の場面やトラブル場面等に関する議論を行い、実践的な指導方法を身につける。

<科目のポイント>

【共通の視点】

Point
1
idea

学生に教えたい内容を的確に反映した演習プログラムを
企画するためのアイデアを共有する

- ✓ 学部で実施する「心理演習」の内容や目標を念頭に、演習を通じて、学生に何を体験的に学んでほしいかを考える姿勢を持つことを推奨する。
- ✓ 受講者に実際にグループワークを参加体験してもらいながら、グループワークの基本的な運営を理解し、ワークを通じてグループワークの楽しさや難しさを改めて実感してもらう。
- ✓ 参加体験のみに留めず、ワークを運営する側としてのポイントを共有する。ディスカッション時間を可能な範囲で十分確保し、受講者同士の情報共有の時間を充実させた。
- ✓ 演習の“前後”で何を教えると効果的か、積み上げ式・継続的な視点を有した指導と学習について考える。
- ✓ 受講者自身の指導内容や指導方法の特徴、課題等について理解し、今後も自ら向上を図ることができる態度の滋養を促進する。

Point
2
idea

「心理演習」は大学ごとに受講人数や開講学年・期間等事情が異なるため、演習には多様性があり、正解は一つではない点に留意する

- ✓ 各受講者が実際に演習プログラムを考案し、グループ内や全体で共有・フィードバックすることで、様々な演習プログラムに触れる機会になるよう工夫する。

【Ⅰ コミュニケーション】

心理職・対人援助職として求められるコミュニケーションについて改めて省察し、演習プログラム内容への反映を検討する。コミュニケーションに関する理論を幅広く学び、知見をアップデートし、理解を深める。

【Ⅱ 検査・アセスメント】

学部後の習得段階を念頭に置き、学部生段階で教えるべき心理検査の種類・内容、模擬的に心理検査場면을体験できるプログラム設計、アセスメントのポイント、支援計画の作成に関する指導方法について、事例をふまえながら学ぶ。

【Ⅲ 心理面接】

学部生段階で教えるべき面接の種類・内容や学生に求める理解度を把握する。知識のみならず体験的に学べるようなプログラム内容とするためのポイントを、事例をふまえながら学ぶ。

【Ⅳ 地域支援】

公認心理師のアウトリーチ活動や他職種との連携、チームアプローチの実態を、学生が講義のみならず演習を通じて体験的に学ぶためのプログラム内容のポイントについて整理する。

【個別領域】

Ⅰ
コミュニケーション

学生に教えたい・教えるべきコミュニケーションとは何かについて考えをめぐらす

Ⅱ
検査・アセスメント

アセスメントは要支援者のみならず、支援者側や双方が置かれた状況を含む点も共有する

- ✓ アセスメントには変わらぬ基盤と変動することがあることを念頭に、国内外の新しい知見及び伝統的知見を可能な限り偏りなく紹介。
- ✓ 学生を対象として作成したグループワークを受講者に体験してもらい、アセスメントワークについて、「学生視点」「教員視点」の両面で検討を求めた。また最後に、アセスメントワークの改良点を「俯瞰的な視点」で検討。

Ⅲ
心理面接

学生が「安全に」「主体的に」学べることができるロールプレイ（役割演技）を考える体験を共有する

Ⅳ
地域支援

受講生の専門・経験により地域支援に対するイメージや活動が異なる点に留意した上で、受講者同士の交流を促す

- ✓ 冒頭に「地域支援」のイメージを受講者同士で共有する時間を設け、専門や臨床現場の違いにより想定する地域資源が異なることの理解を促進。
- ✓ 心理演習方法論Ⅰ～Ⅲの内容について適宜触れ、Ⅰ～Ⅲで扱った内容が地域支援に含まれることや講義の連続性について説明し、つながりを重視。

02 講習科目のポイント

心理演習方法論Ⅰ～Ⅳ

<科目・講師間での連携・調整>

【共通の視点】

Point 1
idea 心理演習指導方法論および心理演習方法論Ⅰ～Ⅳ他科目とのつながりを考慮し、それぞれの科目で扱う内容を吟味する

- ✓ 作成の途中段階で、心理演習指導方法論および心理演習方法論Ⅰ～Ⅳの担当者間でスライドを共有し、関連する他心理演習科目の内容・方向性を念頭に調整（具体例：心理演習方法論担当者間でミーティングを開催）。

Point 2
idea 他科目と重複する点は、受講者の復習につながるよう参照先を明示する

- ✓ 特に【心理面接】および【地域支援】は、最終日に開講されるため、他科目と重複する点もあることから、他科目のテキストを事前に見て、関連科目・ページについて、スライド内にコメントを付け、復習を促した。

【個別領域】

I
コミュニケーション Iの【コミュニケーション】では特に、演習に取り組む土台作りや心理的安全性の向上等のグループワークの企画運営の基本を学び、II以降の科目に応用する

- ✓ ワークの内容は、構成度が高く、侵入度が低く、かつ参加者が取り組みやすい内容とすることを意識。受講者同士の交流をさらに促し、リラックスできたり、プレイフルに楽しんだりしながら実施できるワークを導入（例：ふたりでコピー、いらすとや検索など）。

II
III
IV
検査・アセスメント
心理面接 【心理アセスメント】【心理面接】はすべての支援の基盤になることを念頭に作成

IV
地域支援 講習会全体の最終科目として重複がないよう、簡略化やワークを連動させる等の調整

- ✓ 他科目で事前に扱っている内容は簡略化する。
- ✓ 例えばロールプレイについて、【心理面接】では実施にあたっての配慮・工夫を扱い、【地域支援】ではロールプレイの振り返り・フィードバックを取り上げる等のすみ分けをした。

<ワーク・意見交換のポイント>

【共通の視点】

Point 1
idea ワーク体験後、様々な動機づけやレディネスにある学生に対応できるようなアレンジについて講義する

- ✓ 公認心理師の養成課程や卒後研修において、グループワークへの参加経験はあっても、企画運営について学ぶ機会は少ない。何を教えるのか、臨床で大切にすべきコミュニケーションは何かを考えることを教授し、「実際の指導に活かす」ことを目指す。

Point 2
idea あえてネガティブな事象を伴うテーマも設定し、学生が安全に取り組めるよう工夫を検討してもらう

- ✓ 受講者間で意見が割れる話題（生死やトラウマ事象等）は、教育上重要な事象であると考え、あえてワークで取り扱った。こうしたことにより、議論も活性化し、受講後も検討を重ねてもらえるような可能性が見えた。

Point 3
idea 学生が「安全に」「主体的に」学ぶことができるようなロールプレイ（役割演技）を考える体験を共有する

- ✓ 学生は、ロールプレイで学ぶことも多い一方で、「うまくできなかった」「適性がない」と戸惑いや恥づかしさを感じやすい。そのため、教わる側の学生の立場を体験するワークを通じて、予防的な対応や事後的なフォローの在り方を考える機会にしよう（例：ロールプレイの事前導入課題の体験ワーク「架空の心理面接のやり取り事例の音読」）。

Point 4
idea 受講者が実際に授業案を作成し、受講者同士で共有する

- ✓ 様々な専門や経験を持つ受講者が作成した事業案を、受講者同士で共有することで、様々なアイデアがあることだけでなく、自身の専門外で行われる支援そのものや、学生にどうイメージさせるかの工夫を共有する。

02 講習科目のポイント

実習演習指導コミュニケーション論 指導者 教員

指導する者自身の経験に基づく指導だけではなく、理論モデルを用いた臨床指導・SV方法を学ぶ

- 実習演習指導における学生の学習支援・促進のための指導技法を学ぶ。
- 講義では、実習演習の際の学生への向き合い方や学習プロセスを理解し、スーパービジョンを中心に知見を深め、合理的配慮をふまえた関係構築、学生の自己効力感を高める指導、学習上の困難を抱えた学生への対応・指導について学ぶ。
- 演習では、実習演習担当教員と実習指導者がともに意見交換を行い、実際の指導場面を想定したロールプレイ等を通じて習得する。

Point 1
idea
＜科目のポイント＞
受講者自身がワークを通じて「理解する」「実践する」のギャップを体験し、指導する者としての課題整理につなげる

- ✓ 受講者自身が、コミュニケーションスキルに改善の余地があることや、フィードバックを受ける際の感情反応に気づくことを狙いにワークを設定する。例えば、新たな学習法（限界学習など）を実施したり、講師より評価・フィードバックを加えるとすると、正しくできるか不安を感じたり、新しい課題に意欲が湧いたり、受講者の反応は多様である。このように、緊張や不安、意欲的でリラックスした姿勢が学習に影響することを身をもって体験できる。
- ✓ また、指導にはフィードバック・評価が必須であるため、全体や各グループに対して、講師より評価・フィードバックを加えることを意識し、モデルとしてもらう。

Point 2
idea
＜科目・講師間での連携・調整＞
コミュニケーションスキルに特化した内容で構成する

- ✓ 様々な指導法・SVの形式がある中から、学習者のニーズに応じた方法を選択できることが重要である一方、どの指導法にも基盤となっているコミュニケーションスキルについても共有する。

Point 3
idea
＜ワーク・意見交換のポイント＞
ワークは、楽しみながら学べるようにできるだけ「遊び」感覚も取り入れる

- ✓ 全体へのフィードバックにも反映できるよう、講師は可能な限り受講者の間を巡回して接触をはかり、楽しんでワークに取り組むことを促したり、受講者間で積極的なコミュニケーションが生じるよう働きかける。

公認心理師実習演習指導総論 指導者 教員

2日間の講習会を振り返り、受講で得た学び・マインドを各現場に持ち帰り活用することを促す

- 講習会全体を通じて習得した内容を概観し、受講者自身の取り組みへの活用・今後の課題を確認する。
- 公認心理師実習演習指導概論にて、受講者自身が設定した学習目標の達成度や、学んだことをどのように現場で活用するか、個々の取り組みをどのように公認心理師全体の成長につなげていくか、意見交換を行う。

Point 1
idea
＜科目のポイント＞
公認心理師養成を、「今後の指導」という短期的視点と「公認心理師の全体の発展」という長期的な視点から振り返り、認識の共有を図る

- ✓ 冒頭で講習会の目的や意義、全体像を概観した上でワークに入るよう設定
- ✓ 教員・指導者がともによりよい養成を考え、後進を育成するいち個人として、また、公認心理師全体として、皆でレベルアップすることが専門性の成熟につながる、というメッセージを示したスライドを概論・総論共通で繰り返し提示。

Point 2
idea
＜科目・講師間での連携・調整＞
概論の講義・ワークとリンクするように、講義内容やワークを調整

- ✓ 講習会の目的や内容を概観する際には「概論」で用いたスライド資料を活用し、統一感が出るように調整する。
- ✓ 概論のワーク内容（「養成の意義」や「自身の課題や講習会で学びたいこと」に対応するようにワークの課題を設定（例：「概論で記載した課題や学習目標に対してどのような学びが得られたか」））。

Point 3
idea
＜ワーク・意見交換のポイント＞
現状の課題や展望に留まらず、解決や発展に向けて自分自身ができることを考える時間になるよう工夫

- ✓ ワークの際は、誰かに何かをしてもらうといった受け身的な発想にとどまらず、自分では何ができそうかを具体的に考えてもらうようにする（例：「明日からの指導にどのように反映できそうか？」、「公認心理師全体の発展のために、それぞれの立場で取り組めることは何か？」）。

- ✓ 03章では、企画・運営にあたって大事にしたコンセプトや、実施を経て得られたポイントをQ & A形式でまとめました。



企画・設計について

Q 担当教員コースと実習指導者コースを合同開催にした場合、どのような設計上の工夫点がある？

- ✓ 令和5・6年度の講習会では、教員と指導者がともに実習について学ぶことを重視し、合同開催形式で実施しました。
- ✓ 担当教員コースは、教員・指導者が合同で受講する2日間と教員のみが受講する3日間とを分けて実施しました、合同開催の2日間を受講した後に、後半3日間を受講する形式としました。
- ✓ 担当教員コースは全5日間の受講と負担が大きいことから、柔軟に受講日を設定できるよう、複数の受講パターンを設けました。

【令和5年度のスケジュールより：合同（2日間）、教員のみ（3日間）を各3回開催】

実習指導者／担当教員		担当教員		受講パターン例（選択肢）	
11月下旬	第1回合同（2日連続）	12月下旬	第1回教員のみ（3日連続）	① 第1回合同＋第1回教員のみ	④ 第2回合同＋第2回教員のみ
12月上旬	第2回合同（2日連続）	1月上旬	第2回教員のみ（3日連続）	② 第1回合同＋第2回教員のみ	⑤ 第2回合同＋第2回教員のみ
1月中旬	第3回合同（2日連続）	2月上旬	第3回教員のみ（3日連続）	③ 第1回合同＋第3回教員のみ	⑥ 第3回合同＋第3回教員のみ

⇒

Q 学部生や大学院生段階での到達目標はどこで確認したら良い？

- ✓ 令和4年度障害者総合福祉推進事業「公認心理師の多様な活躍につながる人材育成の在り方に資する調査」の報告書をご参照ください。（<https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/001113619.pdf>）

Q 受講形式をハイブリット形式（対面受講とオンライン受講を同時に行う方法）にしたのはなぜ？

- ✓ 対面（現地）型は、受講者同士がリアルなコミュニケーションを取れるという利点があります。一方、オンライン型は遠方の方が参加しやすい、より多くの方が参加しやすいという利点があります。
- ✓ 令和5・6年度の講習会では、対面（現地）型とオンライン型の双方の利点を活かしたハイブリット形式で実施しました。いずれの形式においても満足度や自信は向上しましたが、対面型の方がその程度がより高いことが示されました。詳しくは「公認心理師実習演習担当教員及び実習指導者養成講習会 2023レポート」をご参照ください。

（<https://www.ncnp.go.jp/hospital/patient/docs/5282b96de4c2e4f23fb0696ce2bd14dd65c1208e.pdf>）

Q 科目ごとのオンデマンド開催を実施しないのはなぜ？

- ✓ 科目ごとにバラバラに受講すると、学びの連続性が損なわれ、学習効率が低下する可能性があります。
- ✓ また、オンデマンド開催には、受講者が好きな時間に受講できるというメリットがありますが、直接のコミュニケーションを通じて得られる実践的なアイデアや経験的なノウハウを共有することが難しくなります。これらの理由から、オンデマンド開催は実施しないこととしました。

Q 現地での開催場所はどのように決定したの？

- ✓ 令和5年度講習会は、東京、大阪、福岡で開催しました。主要都市の中から受講者のアクセス利便性が高い場所を選択しました。
- ✓ 令和6年度の講習会は、東京、大阪、愛知で開催しました。前年度の申込者数が多かった地域の近郊都市を選択しました。

運営について



演習のグループ分けで気をつけた方がよいことは？

- ✓ 演習の際は、4名程度のグループを基本にし、対面受講・オンライン受講いずれも教員・指導者が混ざるようにグループ分けしました。

	対面受講（現地）	オンライン受講
グループ分け	座席の左列を教員、右列を指導者と指定する等により、教員・指導者の混合グループになるよう設定	申込時点で受講資格・経験年数等を把握し、ブレイクアウトルームを設定

- ✓ 演習のグループは、一日単位で固定しました。その結果、演習を重ねる中で双方の理解が深まったという意見をいただきました。
- ✓ 一方で、日によって別々のグループになるようにも組み直しました。新しい交流の機会を促進するため、現地では前日とは異なる席に着席するよう促し、オンラインでは日ごとに新たなグループ編成を行いました。
- ✓ オンラインのグループ編成の際は、実習指導の経験が長い人と短い人（または未経験者）をバランスよく配置したことで、より活発な意見交換につながっていました。そのために、申込の時点で経験年数を聞く項目を設けました。



「受講のしおり」にはどのようなことが書かれているの？

- ✓ 受講が決定した方には、「受講のしおり」をメールでお送りしました。この「受講のしおり」には、修了要件や受講の際のお約束、受講決定から修了証発行までの流れなど、受講者が知りたい情報をまとめています。受講者が安心して受講できるよう心がけました。



オンライン参加する受講者にはこういった配慮が求められる？

- ✓ 演習のためにオンラインのグループ設定をすると、現地会場のスクリーンに投影しているスライドが見えなくなる場合があります。必要な情報は手元で確認できるようテキストに記載しておくといいでしょう。
- ✓ 演習で話し合われた内容は、Web上で共同編集できるワークシートに記入してもらいました。演習内容の共有の時間には、対面（現地）受講者にもオンライン受講者が記入したワークシートを紹介し、相互に学びの一体感が感じられるように工夫しました。



受講者同士の交流を促進するための工夫は？

- ✓ 現地参加者には、受講者の名前と所属先を記載した名簿を配布しました。休憩時間には、名簿をたよりに同じ地域の受講者同士が交流している様子がみられました。
- ✓ また、1人職場で働くことが多い心理職にとって、横のつながりを作るきっかけになったという声も聞かれました。



本講習会は非常に長いです。受講者の健康面でどのような配慮ができる？

- ✓ 休憩時間をこまめに設定するほか、一回の休憩時間を15分程度確保できるといいかもしれません。
- ✓ 時間割によっては昼食休憩が遅くなる場合もあります。軽食や飲料等の提供は受講者からもありがたかったとの反響がありました。

講習内容について



受講者はこういった情報を求めている人が多い？

- ✓ 他の施設や大学がどのような取り組みをしているか、「具体的な実習のイメージがほしい」、「実践に活かせる内容を知りたい」という声がありました。
- ✓ 養成は、学部段階と大学院段階で一貫して行うものですが、具体的に学部段階と大学院段階で学習内容がどう変わるか、両段階の接続や違いを明示できると役に立つようです。



スライドを作成する際の工夫点は？

- ✓ 講義スライドと資料用スライドを分けて作成しました。講義で学んだ内容を深めたり、時間内で紹介しきれない詳細な情報を受講者が自主学習したりできるように工夫しました。またスライドは講習会までにPDF形式で配布し、事前学習に役立ててもらうようにしました。
- ✓ 各科目の最後のスライドに講義の総括を記載し、学びを整理できるようにしました。また各科目の到達目標やねらいを達成できているかを自己確認できるチェック項目を設け、ふり返りを促しました。



演習を円滑に進めるにはこういった工夫ができる？

- ✓ 演習の冒頭に自己紹介の時間をしっかり作ることが大事です。
- ✓ 演習のねらい、活用方法、進め方をスライドに明記することで演習の目的を明確にし、スムーズな運用ができるようにしました。
- ✓ 令和5・6年度の講習会では、主担当と副担当の2人の講師を配置しました。演習の際は、主担当が現地のグループを、副担当がオンラインのグループを巡回し、受講者の質問に答えたり、演習が活性化するように適宜声掛けを行いました。

その他



新たに講習会を開催したい場合にはどうしたら良い？

- ✓ 公認心理師制度推進室への届け出等が必要になりますので、厚生労働省のホームページをご確認ください。
- ✓ 公認心理師全体の均一的な資質向上を目指すにあたり、今後、各団体が個別に養成に取り組むのではなく、何らかの形で協働し合うことが期待されます。



講習会のテキスト（スライド資料）を現場で活用しても良いですか？

- ✓ 受講者をご自身の現場で学んだ内容を活用・共有したい場合はどうぞお役立てください。大学の講義や所属機関の勉強会等で令和5・6年度のテキスト資料を使用する際には、出典を明記するようお願いいたします。



担当教員と実習指導者の養成講習会いずれの修了認定もほしい方はどうしたら良い？

- ✓ 本講習会は、担当教員と実習指導者養成講習会を一部合同開催で行いましたが別々の法定講習会です。
- ✓ 合同で実施する科目は共通していても、担当教員と実習指導者では立場によって学ぶべき内容や課題意識の視点が異なります。したがって、いずれの修了証も希望する方は両方のコースの講習会に参加修了する必要があります。

04 受講者の声

- 令和5・6年度の講習会受講者へのアンケート結果から、受講者の声を一部紹介します

教員・指導者を混ぜたグループ分けについて



指導者

教員と指導者の参加者がバランスよく配分されており、活発な意見交換ができたのでぜひ継続してほしいです。

利害関係のない中で、現場と教員の互いの苦労や悩みや困りごとを共有できて、今後の実際の実習先とどんなことを共有していけばいいかの参考になりました。

教員側の指導の流れや、実習担当側の対応のことなど情報交換できたり、お互いの遠慮なども再認識できました。

他大学の先生、様々な施設の先生方と情報交換ができ、各大学・施設の工夫や実際を知ることが出来たのはとても良かったです。



教員

学校の先生と、実習受け入れ施設の担当職員とで、近い地域の人たちは顔合わせを兼ねてグループを一緒にするようなことがあれば、学校の先生の実習先の開拓も兼ねられるのではないかと感じました。

養成側の先生や他分野の先生方とざくばらんにお話できたことがよかった。分野ごとの困り感や対応案も、同分野の先生と共有できたらより良かった。

ハイブリッド開催（対面受講・オンライン受講）について

対面の良さ、オンラインの便利さの両方を実感しました。特に、対面で実習指導者の先生と同じ空気感の中で学べたのがとてもありがたかったです。



教員

開催都市に行くことを考えると時間とお金がかかり地域格差が生まれるので、オンライン開催はとても助かりました。

久々に対面での研修を受けましたが、会場での交流はとても実りがありました。また、送り出す側と受け入れる側の並びの工夫も良かったです。話をするたびに励みになりました。



指導者

自身の住んでいる圏外の方々との意見交換ができたのはオンラインならではの良かったと感じました。

立場や分野を超えた連携について



指導者

国家資格化から5年が経過し、当時はただ集まった印象があった各職能団体が、後進育成のため、心理職の専門家として何を大切に、いかに社会的使命を果たすかという点で団結し、今回の講習会が企画・運営されたと考えます。今回標準化された体制を基に、実際に実習を受けた方達が、公認心理師として世に輩出された時に今回の講習会の効果が見えると思います。

職能団体も分野も分かれているので、公認心理師が一堂に会しただけでも意味があると思います。

公認心理師が職能団体として凝集性と専門性を高めていくためにも、今回のようなやり方で卒後5年目の方に安定的に実施していけることが、本当に有益ではないでしょうか。

心理職は職能団体が様々ある中で、本講習のように団体を横断したものが良い場となっているように思います。職能団体が力を発揮する上でも、日本の人口動向を考えても、このような団体を横断した、あるいは統合したような場が今後もあれば良いです。



教員

講習会全体を通じたコンセプトについて

日頃あまり考えない「公認心理師とは」「実習とは」等広い視点で考えるきっかけをもらい、参考になりました。



指導者

公認心理師の未来について考え語る機会はとても貴重で、自分自身の成長や動機づけにもつながる講習会だったと感じます。

今回の講習会では目標設定や演習・実習の意義などを確認し学ぶことで、教員側と実習指導者側の足並みを揃えて共通認識にできたことがとても良かったと思います。



教員

「業界が一丸となって」育成するというメッセージが繰り返されたのが素晴らしい。比較的若い講師陣による意欲的な講義と演習であった。

A施設：学生・教員と目標を共有し、学習効果を高める実習指導のサイクルを実現

《受講後に共有した情報・活かされた学び》

- 教員とともに受講できたことで、教員側が実習先に興味関心を持っていることや、指導者側からの情報共有が大学での教育にも有効なこと等が肌感覚で分かった。
- 互いに忙しいだろうと、コミュニケーションが憚られていたが、遠慮せずに互いに連絡を取ることが双方にとってメリットとなることが分かり、コミュニケーションを取ろうという動機につながった。

《所属先での変化》

- 実習指導者と学生との相互交流や学生の主体的な意見を引き出すような姿勢が学習効果を高める上で重要であると再確認できた。実習目標は立てていたものの、指導者側での共有に留まっていたため、学生と一緒に目標設定・振り返りをするよう運用を変えた。
- 実習開始時に目標を共有し、実習後に振り返りレポートを書き、疑問点を翌実習日の開始時に解消する、というサイクルを回していけるようになった。
- 学生との認識共有がスムーズになったことで、学びの優先順位が明確となった。短期的具体的な目標や、より長期の大きな目標の双方に沿った実習ができるようになった。
- 大学側・教員とは実習内容・進め方・振り返り方法等について対面で共有する場を新たに設定した。教員も実習内容をよく理解したことで、大学での指導や振り返りにも活かされているという。

《所属先・同僚からの反応やコメント》

- 現場経験を基に手探りで実習プログラムを作ってきたが、体系的に見直す機会が得られた。
- 目標設定を明確にして学生と共有したことで、レポートも目標に沿った内容になっており、学生の成長を適切に促せていると手ごたえがある。学生も目標が明確になり実習を受けやすくなったのではないかと感じている。

受講者からのコメント・感想



指導者

令和5年度受講
オンライン参加

- 職場では、教え方を体系的に学ぶ機会が少ない。指導者側にとっては、学生指導だけでなく、OJTでの後輩指導なども含め、一貫した指導体制を振り返る機会となった。
- 大学とは、互いに「困っている」を共有して一緒に考えていく、という関係性へと見方が変わった。立場を超えて、「学生を指導していく」という共通の課題を共有し、同じ方向を向いて実習指導をしていくという考え・姿勢を持てた。



指導者

令和6年度受講
現地（東京）参加

受講者からのコメント・感想

- 現地会場での教員・実習指導者の4名でのワークは、異なる立場による緊張感を含めて新鮮な学びであった。
- 受講を通じて、心理師を目指す学生がこういった教育を受けているのか、実習に関する教員の苦労や工夫などが分かった点が収穫である。

B大学：具体的な取り組みを共有できたことで、改善策の気づきにつながった

《受講後に共有した情報・活かされた学び》

- 他大学、他機関において、どのような養成プログラムが行われており、どのような課題があるのか、またその対応について、具体的に共有することができた。
- 心理演習の授業内容、スーパービジョンの方法論などは実践に即応できた。
- 心理実習に関しては、本学の体制を再点検する機会につながった。

《所属先での変化》

- 心理実習に関して、緊急事態やトラブルが発生した際の対応やその予防策について、本学には未整備の事項があることが分かった。講習会で得た他大の情報を参考にしつつ、実習体制の再点検を実施。
- 講習会で得た知識を生かして、心理演習で行うグループワーク等の企画の再検討を行っている最中である。

《所属先・同僚からの反応やコメント》

- 他大や他機関の方々と交流し、情報を共有する機会があったからこそ、本学の体制の不備や改善策に気づくことができてよかったというコメントをもらった。
- 講習会では、実際の指導に即座に活用できる知識やスキルを得られたという反応が聞かれた。


教員
令和5年度受講
オンライン参加

受講者からのコメント・感想

- 5日間という長丁場だったが、自分が指導者としての立場にあることを再認識し、より責任を持って後進を指導しようという意識が高まった。
- 自分はどのような公認心理師を養成したいのか、を考えて指導に反映させることは、自分のこれまでの心理専門職としての育ちを振り返ることでもあった。
- 指導者として、また臨床家として、一つの区切りをいただいたと感じる機会となった。

謝辞

このハンドブックの作成には、さまざまな立場、分野の先生方にご協力いただきました。本当にありがとうございました。
皆様のこれまでの工夫やアイディアがたくさん詰め込まれています。

今後も、こうした取り組みを生かして、これからの講習会がよりよいものになっていきますように。



作成

国立精神・神経医療研究センター病院 臨床心理部
事業担当者一同

公認心理師実習演習担当教員及び実習指導者養成講習会事業
企画運営スタッフ一同

株式会社浜銀総合研究所 地域戦略研究部
主任 藤好 善久
研究員 遠山 夏子

作成協力者（敬称略、ハンドブックの掲載科目順）

企画委員／講師	伊藤 正哉	国立精神・神経医療研究センター 認知行動療法センター	
企画委員／講師	川畑 直人	京都文教大学	日本公認心理師養成機関連盟
講師	薬師寺 真	倉敷児童相談所	
企画委員／講師	新井 雅	跡見学園女子大学	
講師	高橋 哲	お茶の水女子大学	日本公認心理師協会
企画委員／講師	田上 明日香	SOMPOヘルスサポート株式会社 SOMPOインスティテュート・プラス（株）	公認心理師の会
企画委員／講師	高橋 哲	お茶の水女子大学	
講師	中村 菜々子	中央大学	
企画委員／講師	古村 健	名古屋市立大学	日本心理学会
企画委員／講師	古川 洋和	鳴門教育大学	公認心理師大学教員連絡協議会
企画委員／講師	田附 あやか	大正大学	
講師	青木 佐奈枝	立正大学	
講師	佐藤 宏平	山形大学	
企画委員／講師	野村 れいか	九州大学	日本公認心理師協会
企画委員／講師	岩壁 茂	立命館大学	日本心理臨床学会
講師	首藤 祐介	立命館大学	

公認心理師実習演習担当教員及び実習指導者養成講習会ハンドブック
～担当教員と実習指導者がともに養成を進めていくためのヒント～

2025年3月31日 第1版

国立精神・神経医療研究センター病院 臨床心理部

本ハンドブックの無断転載・転用はご遠慮ください。



公認心理師

実習演習担当教員及び
実習指導者養成講習会



2025年3月

国立精神・神経医療研究センター病院 臨床心理部